

2016. 7. 14 (木)

## チャペルに出席する効用

難波 功 士

この春から学部長の仕事を始めて、この場には1年生の人が多く、記憶にある人もいるかもしれませんが、私の最初の仕事は入学式のときに、学長がしゃべっている間、体育館の壇上で座っていることでした。1年生はあのときに学長が何をおっしゃったか忘れてるかもしれませんが、私も忘れていますが、1つだけすごく心に残っていることがあります。

学長はいきなり、大学に入ったばかりで、明日からの生活がどうすればうまくいくのだろうという状態の1年生に向かって、「明日からこの4年間で何をやるのか探さない、夏休みまでには決めなさい」とおっしゃいました。

しかもダブル・ディグリーと絡めて2つ何をやるのか、すぐに見つけなさいとおっしゃいました。むちゃだと思いましたが、4年間は短いので、おっしゃることもわかると思った記憶があります。こんなことを言われると、まだ見つけてないと不安になる人もいるでしょうが、とにかく見つけようとするのが大切なのだと思います。

先週金曜日の鈴木謙介先生の話は、探し続ける、求め続ける、門をたたき続けていけば、それでいいのだという話だったと思います。誰かが何かを与えてくれるのではないか

と待っているよりも、自分でいろいろ試行錯誤することが重要だというお話でしたし、そのような聖句だと思い今日は読んでいただきました。

頑張ってください。上回生たちもまだ見つかっておらず、焦っている人も多いかもしれませんが、探し続けることに意義があると思ってください。

これ以上はあまり言うことがないのですが、ここで「以上！」と言って終わるわけにはいかないので、今チャペルに出ている人たちには、後期もできるだけ出てきてほしいので、チャペルに出ることはいいことだという話をしたいと思います。私は関西学院で20年間も働いていますが、クリスチャンではなく、ほとんどキリスト教を意識してこなかった人間でした。

でも、春から学部長の職に就いて、できるだけチャペルに出るようにしてみると、意外とキリスト教は面白い、キリスト教の素養があったら、もっといろいろなことが楽しめたり、わかったり、あの映画がもっと深く理解できていたのだと思うことが多々ありました。そのようなことをできるだけ皆さんとシェアしたいと思いましたので、自分の経験を時間の限りお話しさせていただきます。

## 気仙沼弁の聖書

ここからは気楽にしています。最近、たまたま読んだ本がとても面白かったので、この『国民のコトバ』という本から紹介したいと思いますけれども、高橋源一郎という作家が書かれた本です。どのような本かという、世の中にはいろいろな独特な言葉遣いをする人がいることを面白おかしく分析したり、まねしたりする本で、例えば、『VERY』という雑誌の「『VERY な』ことば」という文章では、お金持ちの意識の高いマダムたちの独特な物の考え方や言い方を「ペリーなことば」と名づけ、どのようなものか分析しています。

真ん中の辺りに漢字の漢と書いておとこと読ませる、「漢な』ことば」とあると思います。ギャル男(お)という言葉がまだあるかわかりませんが、『メンズナックル』や『メンズエッグ』といった雑誌の言葉遣いを面白おかしく分析しています。独特な雰囲気を持ったホストっぽいお兄さんたちが、独自の価値観や世界観を持っており、その言葉遣いをまねているわけです。

この中で、何のこともわからないと最初に思ったのは、後ろから5つ目の「『ケセンな』ことば』ですが、これは若手県民の気仙沼の方言を取り扱った章です。なぜ取り扱われているかという、気仙沼に住んでいるクリスチャンのお医者さんが聖書を気仙沼弁に訳して、たまたま東日本大震災と重なって話題にもなったからです。評判を呼んだことで高橋さんもその聖書を取り寄せて読んだという話です。

チャペルで話さないといけないと思っていた時、たまたまこの『国民のコトバ』を読ん

でいて、先ほど読んでいただいた聖句の気仙沼弁バージョンをみつけました。私は東北弁が分かりませんので、きちんと読めませんが「願って、願って、願う続ける」と訳せるそうです。

これだけを見ると、単に面白がっている感じですが、高橋源一郎さんは、キリスト教に関して門外漢で、リテラシーのない人間にとっては、聖書の言葉をこのように訳してもらったほうがわかりやすいのではないかと書いています。

例えば、有名な聖句で、「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった」と言われると、すごいことを言っていると思いますけれども、どのような意味がよくわかりません。

でも、これを気仙沼弁に訳すと、もちろん翻訳したお医者さんの解釈も入っていますけれども、「初めに在ったのァ 神さまの思いだった。思いが神さまの胸に在った。その思いごそァ神さまそのもの。初めの初めに神さまの胸の内に在ったもの」です。このように言われるほうが、素人にとっては、何のこともだかよく分ると高橋さんは書いていました。

このお医者さんも面白がってやっているわけではありません。イエス・キリストが最初に説教をしたのはガリラヤという地方ですが、そこはローマやエルサレムに比べれば片田舎ですし、辺境の地です。その庶民に語っている以上は、地の言葉で語ったはずですが、日本語に訳すときに格調高い言葉になってしまったために、非常に神聖な感じがしていいところもありますが、普通の人たちとの間に壁を作っているのではないか

と書いてありました。

## 日経新聞に連載したコラムから

このようなものをお配りしたので見てください。総合体育館で学長のあいさつがあった後に学部に分かれて、私が中央講堂でお話したときに、このような連載をやっていますと1年生に話した記憶があります。それを2回分コピーしてもらいました。

「早天祈祷(きとう)会」の方は、キリスト教とすごく密接に関係がある話です。毎週金曜日の朝に正門に入ってすぐ右手にあるランバス・チャペルでお祈りをしていますけれども、社会学部を代表して話さなければいけなかった経験をもとに書いています。

でも、「早天祈祷会」に書いてあることの前提が「よみがえる高田渡」という方なので、そちらの話を少し解説しながら、そこからどのようにキリスト教につながるのか話したいと思います。

「よみがえる高田渡」の方を見てもらいたいのですが、このような新聞広告が4月1日の日経新聞にあったという話から始まります。新聞広告は見ていないと思いますが、この広告の動画の方は、いろいろな所で話題になったので見た人もいかもしれませんが、海外からも反響があったものです。

この新聞広告は、赤城乳業のガリガリ君の広告で、25年間、ガリガリ君を60円で売っていましたが、70円に値上げすることをおわびする広告です。「値上げ」という曲の歌詞が書かれています。最初は値上げをしないと書いていたのに、最後には値上げに踏み切ろうで終わる歌詞です。

10円上げることをここまで仰々しくやることで、この広告は評判を呼んでいたと思います。私も学部長をやっていなかったら、広告文化論を教えている立場だったので、このようなことに興味がありましたし、面白いと思って見ていました。プラスこの広告がいいと思ったのは、「値上げ」という曲を歌っていた高田渡が大好きだったからです。

1960年代から活躍していたフォークシンガーで、もうお亡くなりになった人ですが、1960年代の話ですから物価、商品の値段がどんどん上がっていくときに、会社の偉い人や役所の人たちが最初は上げないと言っていたのに、最終的に値上げすることを皮肉ったような歌です。

今の皆さんに言ってもわからないと思いますが、私は1970年代に中学生でしたが、その頃はPCもインターネットも、携帯もスマホも何もなかった時代だったので、私たちにとっていちばん身近なメディアはAMラジオになります。

ラジオの受信機を皆さんは見たことがないと思いますけれども、私は中学時代一生懸命、聞いていた頃があり、好きな番組のパーソナリティーが高田渡のファンで、今の言葉でいうと、番組の中でヘビーローテーションしていたので、自分も好きになったという話を書いています。

高田渡が好きになったことから派生して、高田渡が何曲もカバーしているウディ・ガスリーというフォークシンガーが好きになりました。第二次世界大戦の戦前から戦後にかけて、フォークソングを歌って人気を博した人です。その人の自伝的な映画を高校生のときに見て感動したという話を書いていると思います。ギター1本抱えて汽車にただ乗りを

して、全国を放浪しながら歌を歌うような人でした。

この人からキリスト教に行くのは割と簡単な話です。ウディ・ガスリーには、有名な「ジーザスクライスト」という曲がありますが、放浪しながら歌を歌っている自分の姿と重ね合わせて、キリストは貧しい人に分け与えなさいと言ったために殺された、彼に従う者の中にイスカリオテのユダがいて殺されたという歌を歌っています。有名な曲なのでYouTubeで拾って聴いていただきたいと思えます。

車をただ乗りして全米を放浪するライフスタイルはウディ・ガスリーだけのものではなく、当時はホーボーと呼ばれる人々がいて、その群れの中にウディ・ガスリーも入って歌い続けていました。

特に大恐慌以降、たとえばカリフォルニアでブトウつみの仕事があるという、車をただ乗りして行って、働いて日銭を稼いで転々と渡り労働をする人たちが当時はたくさんいました。その人たちを描いた、シカゴ都市社会学の名著に『ホーボー』があります。ホーボーたちが独特な文化を築いたという本です。とても面白い本なので社会学部生には読んでほしいと思うのですが、ウディ・ガスリーをきっかけにホーボーに興味を持ったと、「よみがえる高田渡」というコラムでは話は展開していきます。

### ドラマ『マッドメン』とホーボー

新聞広告から入ってホーボーまでいってしまい、この話にどのように決着をつけられたいのかとすごく悩みました。そこでいきなり自分の好きなテレビドラマの話ですが、これ

も誰も知らないと思いますけれども、『マッドメン』というドラマを知っている人はいますか。8年間、7シーズンにわたり作り続けられた、アメリカのあるケーブルテレビ局が作った番組です。

たくさん賞を取り、人気や話題性でいえば、『セックス・アンド・ザ・シティ』よりもずっと上だと言われますが、日本では当たりませんでした。BSで何回かやりましたが、あまり誰も見ませんでした。私は個人的に大好きですし、舞台が1960年代の広告業界なので、その興味もあって見えました。

『マッドメン』は1960年代の広告業界で、みんな気が狂ったように働いたり、遊んだり、当時はマスメディアがいちばん輝いていた時代でしたから、花形の職業の人たちがこんな大騒ぎしていたというドラマです。

ニューヨークのマジソンアベニューという所に広告代理店の本社が集中していましたから、英語でマジソンアベニューというと、広告業界のことを意味します。マジソンアベニューの最初のMADを取り、かつ、気が狂ったように働いたり、遊んだりしている人たちなので『マッドメン』というタイトルになっています。

主人公のドン・ドレイバーは、敏腕コピーライター、クリエイティブディレクターです。たばこを吸いまくり、職場で酒を飲んで、セックスばかりしている浮ついた世界を描いているドラマです。ですが、そのドン・ドレイバーは恵まれたバックグラウンドの人ではなく、血のつながりのない親に育てられていました。

1950年代の朝鮮戦争の際、兵士として朝鮮半島に渡っていて、そのときに自分の過

去を消したいと思い、戦友のドン・ドレイバーが死んだことをいいことに彼になりすまし、その後は生きていくという複雑な過去を持つ人です。時々、そのような生い立ちが、ドラマの中にも描かれていて、とても興味深いのです。

でも番組全体は、基本的に1960年代の華やかなニューヨークが舞台で、当時の風俗が楽しめることもあってアメリカではヒットしました。しかし、その背景やコンテキストがわかりづらいので、日本では全然当たらなかったドラマです。

この『マッドメン』とホーボーは全然関係がないように見えますが、最初のワンシリーズ目に、「ホーボーコード」という回がありました。どのような話かという、ドン・ドレイバーの養父が、ホーボーの人を働かせたにもかかわらず、最後に賃金を渡さずに追い払うという話です。

立ち去る時、そのホーボーは何をするかという、門の柱の所にあるマークを描きます。その意味は「dishonesty person lives here」、嘘つきがここに住んでいると仲間のホーボーに独特のサインを使って知らせるわけです。ホーボー独自の行動や文化、そうしたホーボーソングの中からフォークソングも生まれてきたのです。

コラムはそこで終わったのですが、「ホーボーコード」を見返してみたら、『マッドメン』というドラマのエンディングには、必ずその時代の名曲がかかり、それも大好きなのですけれども、ホーボーコードの回はゴスペルがかかっていました。

時間がないので、全部かけることはやめようと思います。検索してもらったら出てくると思いますが、Professor Johnsonの

『Give Me That Old Time Religion』という黒人霊歌でかっこいい曲です。

冒頭だけこの曲の動画を流します。ダニエルの7章17節を今朝は読みますと言って、その後人々がワーワーと歌になだれ込んでいきますが、この動画を見てダニエルとは何だと気になり、旧約聖書のダニエル書の7章17節を開いてみると、そこで語られている言葉とこの曲の内容が一致していて、すごく面白く読めました。

お配りした「よみがえる高田渡」をご覧ください。高田渡から芋づる式にProfessor Johnsonの曲に行き当たり、ダニエル書にまで行き着きました。「早天祈祷会」の方の4段目に、ダニエル書について書いていますけれども、その内容はすごく面白いのです。

## 身近な存在としてのキリスト教

聖書はとっつきにくかったり、尊いことを言ってるのかもしれませんが、なんだかわりにくいなぁと思っていましたけれども、聖書にも読み物として楽しめる箇所があったりします。なのでチャペルへ来るたびに、毎回旧約聖書を拾い読みしていました。ダニエル書を読んで、ダニエルはすごい、やばいと思ったりしながら、チャペルの始まりを待っていることがありました。そうしていると、意外といろいろなものがキリスト教とつながっていることが見えてきて、面白い半年だったと思います。

駆け足になってしまいますけれども、事例を挙げますと、私はある運動部の部長をやっていますが、関関戦に臨むチャペルに行ってみると、「We Shall Overcome」という曲が讃美歌として存在していました。アフロ・

アメリカン・スピリチュアル、私たちの世代だと黒人霊歌という言い方になりますけれども、そういったものの1つだと知り、とてもびっくりしましたし、「We Shall Overcome」のメロディーはわかるので、きちんと歌えてうれしかったです。

『トゥルーマン・ショー』という映画も誰も知らないと思いますけれども、この映画は前からずっと好きだったのですが、その中の登場人物でクリストフという名前の人が出てきます。クリストフ、イコールクリストでこの話は成り立っていることがわかると、この映画が全然違うように見えてきます。最近、このようなことがたくさんあります。「We Shall Overcome」がどのような曲なのか、『トゥルーマン・ショー』がどのような映画なのか、なぜ私とその曲や映画で反応したのかと、いろいろ興味を持ってもらえたらありがたいと思います。

最後に1つだけ紹介しますと、最近、面白く読んだ『現代文化とキリスト教』は、打樋先生も書いておられますが、関西学院の先生たちが中心となり、漫画やミュージックビ

デオ、ミュージカル、映画などポピュラーカルチャーの中でキリスト教やキリストがどのように描かれているのか、それを糸口にして、キリスト教に関して興味を持っていくという本です。

この学期、チャペルに出続けてキリスト教を意識してくると、そのようなもの全部が気になり、自分の中につながってきて、いろいろな面白い発見がありました。この年になって新しい経験ができることはなかなかないので、豊かな時間を過ごせたと思っています。

最初の話に戻りますけれども、何がしたいか、どのようにしたいか、まだわからない人がいると思います。尋ね続ける、求め続ける、門をたたき続けることが大事だと思いますし、それはこのチャペルの扉をたたくことかもしれません。ここに出ることにより世界も広がりますし、新しく知ること多くなりますので来学期もぜひ出てください。

時間をオーバーしていますけれども、ここで私のお話は終了します。ありがとうございました。

(社会学部教授・学部長)